

2017.10.8 年間第27主日

## 「ぶどう園と農夫」のたとえ

マタイ福音書 21:33-43

（イエスは祭司長や民の長老たちに言われた）「もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。さて、収穫の時間が近づいたとき、収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちのところへ送った。だが、農夫たちはこの僕たちを捕まえ、一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。また、他の僕たちを前よりも多く送ったが、農夫たちは同じ目に遭わせた。そこで最後に、『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を送った。農夫たちは、その息子を見て話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう。』そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった。さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか。」彼らは言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない。」イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、

これが隅の親石となった。

これは、主がなさったことで、

わたしたちの目には不思議に見える。』

だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。」

説教

わたしたちは自分たちが努力することで得たものや得たことは、自分たちの

手柄だと思えます。汗水たらして働いた成果を誇りたくなります。農民たちもそうだったのでしょ。種まき、耕し、雑草をとり、収穫したのは自分たちだ、それを収穫時期にだけやってきて主人のものだからぶどうを差し出せという、黙って差し出すか、差し出したくないでしょう。自分のものだといいたくなります。このように理解、解釈することもできないことはありません。

**さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、この農夫たちをどうするだろうか。」彼らは言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない。」 21 : 41**

このブドウは働いた自分たちのものだと言張して、主人のつかいを殺し、しまいには跡取り息子まで殺害する様子が語られ、殺しはいけない、殺したものは報復を受ける、とイスラエルの指導者たちに言わせて「それこそがお前たちなのだ」とイエスは彼らに裁きをくだします。

さて、ぶどう園で働く人たちは「殺し」までやって欲しかったものとはなんだったのでしょか。

彼らは労働者ですから賃金を受け取っているはずです。この福音を分配問題として、ひらたくいえばお金のめごととして見ると、賃金に不満がありその不満が積もり積もって、いっそのこと財産ごといただく一致団結して主人に歯向かったと読むこともできます。

ただ、この主人は気前のいい主人（先々週の福音）でした。朝から働いた人にも最後にちょっとだけ働いた人にも同じ賃金を支払いました。常識的にはちょっと奮発しすぎかなあ、これじゃ仲間内でもめごとが起きるのではという心配を残します。また先週の福音は主人の息子はぶどう園に行けといわれ、ハイと言っていかなかった息子と、イエエと言って行った息子のたとえが語られました。きょうの福音では跡取り息子は殺害されますので、行かなかった息子（不正直なほう）が生き残ったこととなります。皮肉な感じも残ります。いったい主人はなにを配っていたのでしょか。たしかに主人は1デナリを

誰かれの区別なく配りました。後に来たものから先に1デナリを受け取ります。この後にきて先に受け取った人はそれからどこに向かったのでしょうか。またぎやくに先にきて後に受け取った人たちはどこに行ったのでしょうか。ひとつの考えですが最初にきて最後に1デナリを受け取った人はぶどう園にとどまり、日雇い人から正社員になってぶどう園で働き続けたと仮定します。朝から働いた人のほうが、最後にちょっとだけ働いた人より、働き手としてみれば役に立ちそうです。もし私が雇うならこの人たちのほうを選びます。その人たちは毎日、ブドウの世話をし収穫時期には日雇い労働者の手助けを得て、豊かに実ったブドウを収穫しました。そこに主人の使いの者がやってくるわけです。

◆「実のならないいちじくの木」のたとえ

そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」ルカ13：6-9

むかし日雇いで雇われた人がぶどう園で働き続け、ベテラン園丁となつてある程度の裁量を任されていたかもしれません。主人は彼に実をつけないいちじくの木を切り倒せと命令しますが、園丁はとりなし（切らないでと）を願っています。ルカ福音ではこの後の顛末は記されていないので、いちじくが切り倒されたか実を結んだのかはわかりません。ただ、福音書ではいちじくは良いたとえにも悪いたとえにもつかわれます。ここでは「いい、悪い」ははっきりしませんが、律法主義になってしまったイスラエル（悪いほう）にたとえられることが多いようです。

無理やりルカとマタイの福音をくっつけて読んでみればこのいちじくは切り

倒されずに実を結び、その実は悪いほうに作用してきょうの福音のように主人の息子=イエスを殺してしまった、とも解釈することができます。一見やさしそうに見える園丁が実は悪くて、勝手に切り倒せと命じている主人のほうが正しかったとも読み取れます。

福音を聴いていると普段とは違うことが響いてきます。ふつうは良いことのように思えることが実は悪いことだったり、悪しきことが良きことであるようにも感じます。主のみこころを知ることができますように。主がわたしたち一人ひとりにお配りになった1デナリを、わたしたちが正しく受け取ることができますように。そして主の照らす道を歩めますように。

-----